# かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英氏）

第 140 号

平成22年３月24日

編集　旭川医科大学
発行　教務部学生支援課

ホッキョクキツネ（旭山動物園）　（写真撮影：学生支援課）

卒業生を送るにあたって……吉田　晃敏……2
医学科第32期生に贈ることば……長谷部直幸……4
看護学科第11期生を送るにあたって
……北村久美子……5
卒業にあたって……江川　智美……6
卒業にあたって……嵯峨　健広……6
卒業にあたって……酒井健太郎……7
卒業にあたって……佐藤　祐子……7
卒業にあたって……吉田　有里……8
医学科第32期卒業生名簿……8
卒業にあたって……玉置　　渉……9
卒業にあたって……松橋　　恵……9
卒業にあたって……脇坂　珠希……10
看護学科第11期卒業生名簿……10
平成21年度　博士・修士学位記授与者名簿……11
一年を振り返って……木田涼太郎……12
一年を振り返って……眞島　昂也……12
一年を振り返って……中田　亜希……13
一年を振り返って……小野寺加純……14
一年を振り返って……南　　彩……14
教授就任のご挨拶……西條　泰明……15
教授就任のご挨拶……川村祐一郎……16
教授就任のご挨拶……西川　祐司……17
教授就任のご挨拶……古川　博之……18
教授就任のご挨拶……鎌田　恭輔……19
平成21年度　１年のあゆみ……20
各種保険について……22
平成22年度日本学生支援機構奨学生の募集について …22
平成22年度看護学科学生に対する奨学資金の貸与について …22
平成22年度前期分授業料免除及び延納・分納について …23
授業料未納による除籍について……23
新入生歓迎合宿のご案内……23
訃　　報……24
学生団体の「継続届」「設立届」の提出について …24
ギター部「ニューイヤーコンサート」……24

# 「高い志」、「深い配慮」そして堂々とした「人前力」を

学　長　吉　田　晃　敏

医学科第三十二期生96名の皆さん、並びに、看護学科第十一期生68名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

皆さんの成長を見守り続けて来られたご父母の皆様の感慨も、ひとしおと思い、重ねてお祝いを申し上げます。

そして、学年担任を始め、教職に当たられた先生方、学生支援課を始めとする職員の皆さんも、本当にお疲れ様でした。

また、このたび医学博士の学位を取得された12名の皆さん、そして、看護学修士の学位を取得された18名の皆さん、心からお祝いを申し上げます。皆さんの優れた研究業績に対し、そして指導教員と苦労を共にした、その努力に対し、深く敬意を表します。努力の末につかんだ学位を誇りに、今後も、優れた医療人として益々の活躍を祈っています。

さて、21世紀も10年目を迎えたいま、世界は大きく動いています。

チェンジを掲げて当選したアメリカの大統領には、ノーベル平和賞が授与され、私たちの国・日本でも、初の本格的な政権交代が実現し、二大政党が、それぞれの主張・政策で競い合う、新しい時代へと大きく変わりました。

しかし、足下をみれば、依然として厳しい景気状況が続き、世界経済の二番底への懸念も、まだ消えてはいません。友愛を掲げた新しい政権下でさえ、医療、医学、そして看護分野へ、大胆に予算を振り分けるという発想の転換には、残念ながら未だ思い至っていないのが実情です。

大きな節目に立つ皆さん自身も、先行きの見えにくい時代の狭間で、漠とした不安を抱いているのではないでしょうか。

思い起こしてみますと、今から37年前、本学が産声を上げた昭和48年当時もまた、先行きの不透明な時代でした。為替変動相場への移行とオイルショックが、いわゆる狂乱物価を引き起こし、庶民の暮らしは瀬戸際まで追い詰められていました。政治と経済の混乱が招いた、そのしわ寄せは、本来平等であるべきはずの医療の現場にも及んだのです。都市部と地方との間の、いわゆる「医療格差」が、この時代に一気に拡大していきました。

旭川医科大学は、この、正に、混迷のさなかの昭和48年、「地域医療の新たな担い手」を育成しようという、国の確固たる方針のもと、新設医科大学の第一号として産声をあげました。「医療格差解消」の、いわば「希望の星」として本学が誕生したと言っても過言ではありません。

その年の第一期生として、不安と期待の入り交じった時代の風を背に受けながらも、一方で、大きな希望を胸に、大学の門をくぐった一人が、この私でした。

以来、37年が過ぎ去りました。その間、大学の歩みは、決して平坦なものではありませんでした。今から10年程前には、第１回目の医師過剰論がまことしやかに登場しました。「10年後には１万５千人の医師が余る」「30年後には２万６千人の医師が余る」などと言われ、当時の卒業生は、大きな不安を抱えながら、本学を旅立って行きました。

しかし現実には、医師不足はますます深刻となっています。加えて、平成16年にスタートした新たな研修制度で、大学の研修医が激減し、道内でも至る所で、診療科の休診が相次いでいます、北海道第二の都市、旭川市でさえも、いま、現実問題として医師が足りないのです。

市立病院から整形外科の医師が引き上げ、赤十字病院から精神科などの医師が引き上げました。

一方、看護師不足も深刻です。入院患者７人に対し１人の看護師の配置が最も理想だとする、いわゆる「７：１看護体制」を国が推奨したことで、看護師のニーズは一気に高まり、現在でも、慢性的な看護師不足状態が全国で続いています。

本学では、この「７：１看護体制」を獲得するために、100名を超す看護師を増員しました。

このように見ていきますと、現在、医師や看護師へのニーズ自体は、逆に高まっていて、「幸い」な事に、他の学部の卒業生が直面している就職難は、我々にとっては、ほど遠い状況となっております。

ただ、最近政府が、目の前で起こっている深刻な医師不足を見て、慌てて医師の増員へと舵を切った事で、事態は再び流動的になっています。

本学でも、国や道の要請を受け容れる形で、医学科の入学定員を、平成21年度入試で12名増やし、さらに平成22年度入試では、10名上乗せし、今年の４月からは、第一学年の定員が112名になります。

このように、過去３年の間に、政府の要請を受け容れる形で、全国で1,221名も医学部の定員が増えました。1,221名といってもピンと来ないかも知れませんが、ざっと計算すると、全国で新たに12の医学部が新設された事に匹敵する定員増です。

現在、年間4,400人ずつ医師の数が増えていますので、計算上では、12年後には、日本の医師の数は経済協力開発機構OECDの平均値に並び、22年後の日本は、世界１，２を争う医師大国となってしまいます。

この事態を受けて、２月22日、全国80の国公立および私立大学の医学部で構成する、医学部長病院長会議が、政府に対し要望書を提出しました。その内容は、今後医学部を新設したり、急激な定員増を行わないでほしい、という要望です。これは、新たな「医師過剰論」です。今回の過剰論については、私自身も、このまま単に医師の数だけが増えるならば、現在、歯科医師や弁護士が抱えている問題と同じ問題に直面する可能性もあるのではないかと、正直危惧しております。

皆さんは、この現実をしっかり見据えた上で、医師が不足していようが、将来過剰になろうが、時代の雰囲気に惑わされる事なく、志を高くもった、他の誰でもない、ワン＆オンリーの医師を目指して下さい。

いつか嵐が来るかもしれません。

しかし、自分自身の進むべき方向性さえ明確ならば、何も恐れる事はありません。

建学以来、「高い志」を持った医療人を送り出し続けてきた私たちの旭川医科大学も、いま、将来を見据え、思い切った改革をスタートさせております。

ひとつは、皆さんの在学中に実現した、ドクターヘリです。

旭川赤十字病院が基幹病院となり、本学も協力基幹病院として、運行体制を強力にバックアップしているこのドクターヘリは、熱い想いのもと、「救命救急センター」の設置という、新たな第一歩を踏み出そうとしております。

設置が認可されれば、道北の救急医療体制は、確実に前進します。

一方で、医師不足解消の新たな動きも加速しています。北見市を中心に「オホーツク圏」をカバーしていた、道立北見病院の「循環器内科・呼吸器内科医」が、３月で退職します。

この危機的状況を打破するため、本学の第一内科が、この4月から、「循環器内科・呼吸器内科医」をおくり、その後、「指定管理者制度」という新しい方式で、旭川医科大学が「循環器・呼吸器センター」を経営するという、全く新しい地域医療の支援体制を作りあげることが決まりました。

このことは、先日報道されたため皆さんも驚かれたことと思いますが、今回の決断は、「私たちの旭川医科大学は、地域医療を決して見捨てないぞ！」という、強烈なメッセージになったと思っております。

看護師不足の背景にある、職場環境の改善にも私たちは取り組んでいます。

本院に勤務する看護師に対しては、病院外での研修費用の全額を、大学が負担することを決め、既に動き出しております。これは、他の国立大学病院でも例がない優遇策で、大いに成果を上げております。

さらに、女性スタッフが安心して出産、育児ならびに介護にも取り組めるようにと、「復職・子育て・介護支援センター」（略称「二輪草センター」）を設置し、働きやすい職場環境の整備を、着実に進めています。北海道は、我々の「二輪草センター」の取り組みに賛同し、道は、２月17日に、旭川医科大学方式を、北海道大学と札幌医科大学に取入れ、本学には、補助金を付ける事を、発表しました。

これらの制度改革、並びに、一昨年度から取り入れた「北海道・地域枠」など数々の「入試改革」を通じて、北海道の地域医療に取り組む医師・看護師は、私達「旭川医科大学」が、責任を持って育てあげていくのだという強い意欲と決意を、私自身大学のトップとして、内外へ示すことができたと確信しております。

以上述べたように、私たち大学もまた、現状に満足する事なく、変化変革を恐れることなく、常に前へ前へと向かっております。

さあ、次は、皆さんの出番です。

大学を一歩出れば、もう、皆さんは、一人の医師であり、一人の看護師です。

そこでは、毎日が戦いです。誰との戦いなのか？　そうです。自分自身との戦いです。

現状に甘んじる事無く、常に、一歩先を見据えた医療人になって下さい。

そのとき、皆さんが周囲から問われる事があるとすれば、それは、一人の人間としての力です。

この点について、アドバイスをさせて頂きます。

人間としての力が問われるのは、

ひとつが、プレゼンテーション能力、いわゆる「人前力」です。

皆さんの主張、思いを、的確にプレゼンテーションできるだけの力、「人前力」を、どうか身につけて下さい。

現場に出れば、患者さんとの向き合い方、研究現場での立ち位置など、常に、この「人前力」が問われ続ける事になるはずです。

そしてもうひとつが、人間としての最低限の礼儀、つまり、他者への配慮です。皆さんがいくら高い技術を身につけても、最後に、患者さん自身を救うのは、実は患者さん自身が内にもつ、内的な治癒力です。わたしたち医師は、その治癒力を最大限に高める、いわばお手伝いをしているに過ぎないのかも知れません。この謙虚さを、決して忘れないでください。

皆さんが発する、たった一言で、患者さんは生きる希望を得るかも知れません。あるいは逆に、もうだめだと思ってしまうかも知れません。

医師・看護職者である前に、一人の人間として、他者への配慮、「深い配慮」を、決して忘れないで下さい。

卒業後のある日、深い配慮と、高い人前力を身につけた、志ある医療人としての皆さんに、ぜひ再会したいと願っています。

私自身の「志」は、大学卒業からずいぶんたった、1994年のある日に実現しました。それは、遠隔医療実験のスタートです。

当時はまだ、インターネットさえ十分に普及してはいない時代でした。しかし私自身、このシステムが普及すれば、きっと高度医療の推進と医療格差の解消につながるはずだと確信し、以来、幾多の困難、障壁を乗り越えて、歩み続けています。私自身、まだ志半ばです。これからは、共に医療人として、対等に迎えるようになればと願ってやみません。

この４月には、この中から、研修医として35名の皆さんが本学へ新たに入ってきます。また、看護師として20名本学病院に採用になります。

母校に残られる方々とは、

一緒に、母校の改革を進めて行きましょう。

母校を離れる方々とは、近い将来、「改革を成し遂げた母校」で、新たな志を胸に、共に働ける日を待ち望んでいます。今年は、６期生の西川祐司先生が病理学の教授として、また、10期生の鎌田恭輔先生が脳神経外科学の教授として、母校に戻って来られました。

残る者・旅立つ者、それぞれにとって、ここ旭川医科大学は、昨日も今日も、そして明日も、皆さんの「母校」です。

旭川医科大学は、皆さんを、力強く、応援し続けます。

新たなステージへむけた、皆さんの挑戦に、心からの賛辞を込めて、学長の告辞とします。

# 感じて動け、そして跳べ
## ～ 医学科第32期生に贈ることば ～

医学科第６学年担当　長谷部　直　幸

皆さん卒業おめでとう。６年間の不断の努力が実り、晴れて卒業の日を迎えられたことを心からお祝いします。

医師としての船出の時に、それぞれ異なる感慨があるものと思います。涙と汗、怒りと笑い、驚きと発見、様々な出来事が、良くも悪くも一瞬にして思い出に変わる一大イベントが卒業です。「今日まで」と「明日から」がこれ程までに違うことに感動を覚えるはずです。その感動の大きさは、医学生としての君たちの歴史の重みそのものであるはずです。今あらためて、その歴史を振り返り、皆さんは自分ひとりでここに至ったのではない事に思いを致して下さい。

今日まで皆さんの成長を見守り続けて下さった方々、取り分けこの日を心待ちにしておられたご両親に、まずは素直に感謝の気持ちを伝えて下さい。ご両親の愛情に育まれ、君たちは一歩を踏み出せたはずです。そして仲間の純粋な友情の中で成長し、先輩の温かい思いやりがあってこの時を迎えていることに、感謝の気持ちを忘れないで下さい。感謝を忘れない人は、支えてくれる人々に恵まれるものです。そして必ず大きく成長します。

今年は母校に多くの仲間が残ってくれることを、学年担任として心から喜んでいます。大学が再生しつつあるこの時に、呼び掛けに応えてくれた君たちは、まさにニューフロンテイアです。共に旭川医大の新たな歴史を創りましょう。母校を離れる諸君も、それぞれの新たな環境で、常に旭川医大を代表する気持ちを忘れずに頑張って欲しいと思います。そしていつでも戻って来て下さい。母校の再生には、皆の力が不可欠であることを忘れないで下さい。母校はいつでも君たちを温かく迎えてくれます。そして同期の仲間は、いつでも君たちの大きな力になります。無論、私をはじめ母校の先生たちはいつまでも君たちを支援します。何か有ったらいつでも相談して下さい。

医師としての旅立ちに贈るメッセージをとのことですが、およそ君たちに相応しくない陳腐な格言ばかりが浮かんできます。そこで、独りよがりな言い回しですが「感じて動け、そして跳べ」という言葉を贈りたいと思います。空気が読めないという意味の若者言葉が流行りましたが、「感じて動け」は「空気を読め」という消極的な意味ではありません。皆の心を感じ、必然性を判断し、反応を確かめ、成果を喜びあるいは反省しながら動くという行動の基本原則だと思っています。そのプロセスがあってこそ共感が生まれ、文字通り「感動」が生まれるのです。そしてひとたび飛躍を決意したなら、躊躇なく思い切って行動することです。まさに跳ぶことです。「見る前に跳べ」という言葉には、果敢な行動の無謀さを称賛するニュアンスがあります。大江健三郎氏の同名小説には全く逆のメッセージ、すなわち、跳ぶことの難しさ、跳べないことの苛立ち、自らの判断を放棄して何も行動できないことの切なさが描かれていました。無謀ではいけませんが、君たちは果敢に跳ばなければなりません。「感じて動け、そして跳べ」は、攻めの行動の基本原則とも言えます。大いに飛躍して下さい。最後に感動を手にするのは君たちです。卒業おめでとう!!

稿を終えるに当たり、長谷部流ツイッターをひとつ。「JALが経営破綻しました。日本の翼として本当に面目ない。まさに・・ANAが有ったら入りたい・・。」

— 2010年３月 Vancouver Olympic のスケート陣の活躍とTOYOTA社長の米国での涙を見ながら —

# 看護学科第11期生を送るにあたって

看護学科第４学年担当　北村　久美子

第11期生の皆さん、卒業おめでとうございます。遠く大雪山連邦を望むこの大学で多くの人と出会い、視野を広め、豊かな人間性を育まれたことと思います。

これまで４年間、皆さんを時には厳しく時には温かく見守って下さった担任は、故岩元純教授でしたね。

先生は、皆さんが入学された頃にご病気とわかりご自分の体験をとおして看護学に対する思いと同時に皆さんに寄せる思い、「いい看護師・保健師・助産師になって欲しい」という願いは殊の外深かったことと思います。それ故に、この広報誌「かぐらおか」をとおして卒業生に贈る言葉をたくさん遺したかったのではないだろうかと思われ、直接、故岩元純教授への原稿依頼が少し遅くなってしまったことが悔やまれてなりません。先生は、昨年９月に日本看護技術学会で「ひとびとの生命・生活・希望を支える看護のわざ」という題で、ナイチンゲールの言葉を基にした講演を行い参加者に深い感銘を与えました。皆さんもよくご存知の川嶋みどり教授は、看護界の重鎮でございますが故岩元純教授に弔電が届き奥様のご了解を頂きご紹介させて頂きます。

岩元　純先生

あなたが第八回日本看護技術学会の会長を引き受けて下さったとき、既にご自分のからだの中で進行する病と闘いながらのご決意であったと聞き、この集会の成功を心から祈念しておりました。昨年九月、学術集会長として”人々の生命・生活・希望を支える看護のわざ”を語るなか、「周到な準備のもとでの『献身』こそ、もっとも優れたアートの中のアートである」と、その語源から解説して下さったことが、今も印象深く残っております。その根底にあなたの生死観を強く感じたのは私だけではなかったことでしょう。

チームの企画力と努力に支えられて大成功の学術集会とあなたの屈託のない笑顔は、旭山動物園から眺めた美しい落日とともに、何時までも忘れることができません。

あらゆる痛みから解放されて安らかな眠りにつかれた先生のご遺志を受け継ぎ、より本質的なアートに向かうテーマに光りを当てて歩み、究める後進の道をどうぞお守り下さい。

看護学の外から看護を支えて下さったことに深い感謝を捧げ、心からご冥福をお祈りいたします。

日本赤十字看護大学　川嶋みどり

---

地域保健看護学の授業の中で「ナイチンゲールに公衆衛生看護の本質を学ぶ」を取り上げたことがあります。ナイチンゲールは『町や村での健康教育』(1894)、『病人の看護と健康を守る看護』(1893)を書いています。ナイチンゲールは、病気とは何か、看護とは何か、修練とは何かなど詳細に述べており、「看護は一つの芸術である」とも言っています。そして、芸術である意味を「生命のない画布、冷たい大理石でもない、“命ある体”を扱う看護は最上級の芸術である。最上級の芸術の中でももっとも優れた芸術であるとさえ言明してきた。芸術であるためには画家や彫刻家の仕事と同じように他を顧みない、専心と厳しい準備が必要である。」といっています。このように看護には、知識に基づく実践と生きた体と生きた心と心身一体の感情とに働きかける実践があると思います。心身一体のあらわす感情への働きかけも看護実践をとおして周到な準備の基での『献身』こそ、最も優れたアートのなかのアートである、ということだと思います。自分自身が決して感じたことのない他人の心の中へ自己を投入する力をこれほど必要とする仕事は他に存在しないと思います。もし、皆さんにこのような力が無いのなら看護から身を退いた方が良いとさえ、ナイチンゲールは言っているのです。

看護の仕事を行うとき、病人や健康な人に心のこもった関心を持ち『献身』こそ、最も優れたアートのなかのアートである、という言葉を思い出したいものです。どうか、看護の本質を見失うことなく時には原点に戻り、人の価値観にも触れていくという謙虚さを忘れることなく自己の看護観を高め、立派な看護専門職に成長されますよう心から祈念いたします。

## 卒業にあたって

医学科第32期卒業生　江　川　智　美

国家試験が終わり、今までにない開放感を味わっている。AO入試の合格発表を見て泣いて喜んだあの日からもう6年。国家試験や卒業といったイベントは自分とはまだまだ関係のないことだと思っていたのに、気づいたらもうここまで来ていた。

あっという間の6年だったが、振り返ってみると濃密な6年でもあった。華やかなキャンパスライフが始まると思いきや、高校とは比べ物にならない範囲の試験に、1年生で医学部の大変さを思い知った。合唱部で主席指揮者となり、大人数をまとめることがこんなにも難しいのかと悩んだ日もあった。臨床実習が始まってからは、朝から晩まで疲れた表情を見せずに働く先生方の姿や、病気と闘いながらも何も出来ない学生にやさしく接してくださった患者様に、教科書には書かれていない、医師としてのあるべき姿を考えさせられた。

自分の人生を左右する大切な6年間、旭医で過ごせてとても幸せだったと思う。極寒の中、イオンでのショッピングに飽き、見る映画もなくなると、東京の大学に行っていたらどんなに楽しかっただろうと思うこともあった。冬になるとなんとなく気持ちが暗くなることもあった。それでも、友人と朝まで語り合ったり、仲間と部活に打ち込んだりしていると、そんな気持ちはどこかへ消えて行った。旭川は狭く、旭医は単科大学で学生も少ないが、だからこそ旭医の団結力・仲間意識はとても強い。卒業後もそんな旭医の仲間たちに助けられ、協力しあいながら、成長していきたい。

お世話になった全ての先生方、大学・病院の職員の方々、つらい時に励ましあい、国試勉強を一緒に乗り切った友人たち、一つのことを成功させる歓びを分かち合った部活の先輩・後輩、そして、高校生の私の成績では無謀と思われた医学部の受験を応援し、どんなことがあっても遠くからいつでも味方になって支えてくれた両親に、心からお礼を言いたい。

本当にありがとうございました。これからも末永くよろしくお願いします。

## 卒業にあたって

医学科第32期卒業生　嵯　峨　健　広

中学生の頃、医師になるという夢を抱いてから約10年。6年間の大学生活を終え、いよいよ春から医師として歩み始めます。この6年間で印象に残っているのはやはり5年生からの臨床実習です。多くの患者さんに協力していただき、先生方に指導していただく中で、医師という仕事の難しさ、やりがいを実感しました。実習中、ある患者さんが退院される時に、「ありがとうございました。頑張ってね。」と握手してくださった、あの時の笑顔が今でも忘れられません。

勉強と並んで最も時間をかけたのが弓道でした。6年間の月日を通じて、先輩、同期、後輩に恵まれ、支えられて一緒に大きなことを成し遂げる喜びを知りました。特に5年生の時、全道学生選手権大会で団体優勝できたことはこれまでの弓道人生で最高の思い出です。

また、他大学との交流を通じてできた弓道仲間もかけがえのない存在であり、彼らとの交流のおかげで自分の大学生活がより一層価値あるものなりました。弓道を通じて苦しいことがあっても目標に向かって努力を継続することの大切さをあらためて感じました。また、部活というコミュニティの中で、人間関係を築くことの難しさ、大切さを学びました。

同期のみんなにもいろいろとお世話になりました。時には真面目に医師になるという目標に向かって一緒に勉学に励み、時にはくだらない馬鹿をやって笑いあったりもしました。どんなに感謝しても感謝しきれないです。みんなありがとう。

こうした様々な経験を積む場を提供してくれた旭川医大に本当に感謝しています。これから、医師としての人生を歩んでいくことになりますが、大学生活で得た経験を生かして医師として、人間として成長していきたいです。そして、これまで自分を育て、支え、見守ってきてくれた両親、先生方、先輩、同期の皆、後輩達に感謝し、恩返ししていきたいと思います。本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

## 卒業にあたって

医学科第32期卒業生　酒　井　健太郎

大学生活の締めくくりとなる国家試験を終えて、旭川医科大学からついに卒業するのだとあらためて実感し、寂しい気持ちがこみ上げてきます。

この6年間を振り返ってみると、勉学はもちろんですが、仲間と切磋琢磨して一つの目標に向かって努力した部活動やアルバイトなどの課外活動、患者さんの協力のもと初めて医療に携わった臨床実習など、濃密であっという間の6年間でした。もちろん大変だったり、つらいと感じたこともありましたが、その経験が自分の成長に繋がったことも多く、本当に素晴らしい大学生活を過ごせたことに満足しています。

その中でも私の心の中に一番残っているのは臨床実習での様々な経験です。4年生まではどちらかというと座学中心で、自分が医師になるという実感がまだ希薄でした。しかし5年生になり臨床実習が始まると学生という立場ではありますが、医療チームの一員として患者さんと接することが非常に多くなりました。私はどちらかいうと初対面の方には緊張してしまうタイプなので、最初は患者さんとの接し方が良く分からず、現場で右往左往してしまうことが多々ありましたが、患者さんとの触れ合いの中で自分自身とても成長できたと思っています。まだまだ未熟な私を受け入れて、たくさんのことをお話してくださった患者さんには本当に感謝しています。

私は吉田晃敏学長の「旭医がいいんです！」という言葉が大好きでした。その言葉から、旭川医科大学で学んでいるということは素晴らしいことなんだという自信と誇りを感じることができたからです。私は医師という自分の人生の道標を示してくれた旭川医科大学に少しでも恩返しができるようにこれからも常に努力していきたいと思っています。

最後になりますが、講義・実習で熱心に指導してくださった先生、これまで一緒に支え合い、協力してきた同期のみんな、そして旭川医科大学の先輩、後輩、学校関係者の皆さん、今まで本当にお世話になりました！ そしてこれからもよろしくお願いします。

## 卒業にあたって

医学科第32期卒業生　佐　藤　祐　子

卒業にあたり、振り返ると旭医での大学生活は中身の濃い6年間でした。

勉強、部活、仲間達との出会い、先生方への感謝、様々な思いが交錯します。順番などつけることは出来ませんが、どれもこれも貴重な財産です。

先日終えた国家試験。最後のボスは、それはそれは強敵でした。学生として一番の仕事である勉学ですが、これまでの定期試験ですら医学科の厳しさを感じ時にはくじけそうになりました。普段は楽しそうにキャンパスライフを満喫している同期たちが、ここぞとばかりに集中力を発揮し当たり前のように乗り切っていく姿に、たくましさと旭医の底力を見た気がします。5年生から始まった臨床実習では、実際の臨床に触れ、教科書だけでは済まない難しさを感じ、患者さんという「人」に対峙するという責任を感じました。親切に教えていただいた先生方には感謝すると同時に、先輩としての暖かい人間性をも垣間見た気がします。

東医体優勝を目指して日々励んだ部活。大学生になってバレーボールにこれだけ打ち込めるとは正直思っていませんでした。が、ここまでやり通し満足できたのは旭医が体育大学と間違われるほど部活熱心だからこそ。ここで集中力や忍耐力が磨かれるのではないか？と思っています。また、これほどまでに良い関係を築けるのか、と思えるほどの先輩や後輩たちに出会えたのも旭医だからこそ。生活の基礎と言っても過言ではない部活ですが、私にとっていつしか居心地の良い場所になっていました。ずっと受け継いでいきたい、すばらしい信念と環境がここにはあります。

今後の課題は、ここで得た貴重な財産をいかにして生かしていくか、だと思います。まだまだ未熟なひよっこですが、お世話になった先生方、患者さんにとって少しでも役立てる医師になるため、そして人間としても大きくなるため、努力を惜しまず日々精進する覚悟です。

これまで支えてくれた方々、そして母校、ありがとうございました。

# 卒業にあたって

医学科第32期卒業生　吉　田　有　里

旭川での生活は、私にとってあっという間の６年間でした。私の人生の四分の一を過ごしたにも関わらず、一瞬のことのようにさえ感じます。しかし振り返ってみると、本当に沢山のことを知り、学び、体験し、感じ、考えることが出来た６年間でした。そして、旭川での生活は、明らかに私の人生に多くの影響を与えてくれました。勉強、部活、バイト、飲み会、遊び…いろんな人と、いろんな話をして、たくさん笑い、時には泣きました。

そんな毎日の中で、私の生活の中心にあったのは部活でした。大草原の中を真っ黒になりながら走り回ったゴルフ部と、京都の家元での稽古まで経験させていただいた茶道部。どちらの部活も６年間続けてこられたことは、私にとって本当に大きなことであり、自信となりました。また、途中から参加したギター部では、私が本当に一番好きなことが何なのかを知り、私のコンプレックスを打破するチャンスをもらいました。部活で出会った大切な人々や、多くの繋がりと経験は、何にも代え難い宝だと感じています。部活での様々な出来事が、弱い私を少しずつ前に進めてくれました。部活がなかったら、今の私はないと思います。

そして、今、こうして卒業を迎えられたのは、本当に多くの方々に支えていただいたからだと感じています。大学・病院の先生方と臨床実習で出会った患者さんには、本当にお世話になりました。また、時には温泉につかりながら多くのことを語り合った、楽しい友人に恵まれました。そして、遠くから近くから支えてくれた家族。他にも沢山の方々が私をここまで引っ張ってくださいました。いくら感謝してもし足りないと思っています。

今まで私にしていただいたたくさんの素敵なことを、今後は私が医師として、届けていけたらと思います。今すぐに私が出来る事は、限りなくゼロに近いものですが…

６年間、本当にありがとうございました。

## 卒業にあたって

看護学科第11期卒業生　玉　置　　渉

卒業を前に私が過ごした旭川医大での４年間を振り返ってみると、いろんな人に支えられた４年間であった事を改めて実感することができました。

まずは、入学当初の右も左もわからない頃から卒業研究や国家試験に至るまで、学校での生活や試験勉強を共にしてきた同期の看護男子の友人達です。男子の少ない看護科において彼らのような良い男友達がいたことは私の学生生活を充実したものにしてくれました。

次に、実習で苦楽を共にした実習グループの仲間達です。同じような辛さや喜びを共有できる人がいたことは何よりの救いでした。また、学習面で手助けしてくださった教員、実習指導者の方々、また、私の学習に快く協力してくださった患者様方、本当にたくさんの方々のお陰で講義では得難いたくさんの学びや経験を得ることができたと感じています。

旭川医大での生活で多くの楽しみを与えてくれたのは部活でした。私は弓道部で活動していましたが、先輩、同期、後輩に恵まれ、良い結果を残せたことは嬉しい思い出です。しかし、それ以上に時に真剣に、時に楽しく練習をした時間は大切な時間でした。改めて、大学に入ってからも部活を続けて良かったと思っています。

最後に、私はこの大学での４年間でたくさんの人と関わり、その関わりの中で今に至りますが、その上で最も感謝しなければならないのは家族だと感じています。初めての一人暮らしの私の健康を誰よりも気遣ってくれて、国家試験受験の時は国家試験を受ける私以上に緊張し、心配してくれました。大学に入学して親元を離れて見たことで親のありがたさを改めて実感できました。

旭川医大での４年間は学習だけでなく、人との関わりの大切さを改めて実感させてくれました。看護師は人との関わりが大切な仕事なので、このことを忘れずにこれからも過ごしていきたいと思います。本当にありがとうございました。

## 卒業にあたって

看護学科第11期卒業生　松　橋　　恵

卒業を目前に控え、大学生活の４年間を振り返ると本当に一瞬で過ぎてしまったように感じられます。大学の合格発表がつい昨日のことのように思い出されるのに、もう大学生活が終わってしまうのか…と思うと、とても寂しいです。入学時は地元を離れ、同じ出身地の人が誰もいない環境であり、気の合う友人が出来るか・大学生活を楽しむことが出来るかと不安でしたが、そんな不安はすぐに消え、毎日が楽しい学校生活であったと思います。

この大学生活で、良かったと思えたことは、様々な人と知り合うことが出来たということです。自分とは全く違う価値観を持った人や、ネガティブ思考の私にプラスの考えを与えてくれる友人など、大学に来たことで様々な人と出会い、周りのみんなに支えてもらったことで、充実した４年間を過ごすことが出来たと思います。

特に看護の授業では、実習やグループワークなどグループメンバーと協力して行うものが多く、自分一人では思いつくことのないような考えが出たり、実習で辛い時はみんなで乗り越えたり…と他のみんなが居たからこそ乗り越えることが出来たものも多かったと思います。看護師の仕事も他のメンバーと協力して行うことが多いため、人との関わりを大切にしたい思います。

卒業後は、それぞれの道へ進んで行きます。今まで一緒に過ごしてきた仲間と離れてしまう寂しさと社会人という新しい社会の仲間入りをする期待もあります。私は、卒業後旭川医科大学病院へ就職が決まっています。看護師という専門職になるため、一つ一つの行動に責任を持ち、医療チームの一員として医療に貢献していきたいと思います。

この４年間で私を支えてくれたクラスメイト、アイスホッケー部員、先生方、そして家族に感謝しています。本当にありがとうございました。

# 卒業にあたって

看護学科第11期卒業生　脇　坂　珠　希

入学してから、早４年、もう卒業を迎えることとなりました。今思い起こしてみると、入学式の朝、先輩方にもみくちゃにされながら門から玄関までの道を歩いたことが、ついこの前のような気がします。ついこの前、新入生として先輩方に迎えてもらい、ついこの前、基礎看Ⅰの再試を受けたような…そんな気がします。国家試験が終わった今、国試だけは再試になりませんように…そう願っているところです。

再試の嵐に追われていた私も、来年度からは保健師として内定を頂くことができました。私は、入学してきた当初は看護師になることを夢見ていました。保健師という職業があるということすら知りませんでした。そんな私が、何故保健師を志すようになったかというと、２年生の時の地域保健看護学の講義がきっかけとなりました。保健師について話す先生方の楽しそうな表情がとても印象的で、私に保健師として働くことの楽しさを言葉だけではなく、表情でも語っているように思えました。そこから、保健師という仕事に興味を持ち始め、講義や実習を通して「健康なままでいられるように」「病気にならないように」という一次予防の重要性を学びました。今では、地域に住む人々が住みなれた地域で健康に過ごすことができるよう、お手伝いをしていきたいと思っています。

１年程前に、卒業された保健師の先輩から「気軽に相談ができる同業者が居ることは自分にとっての強みになる」と言われたことがあります。私はこの４年間で、同じクラスだった友人はもちろんのこと、部活やアルバイト、保健師の連絡係りを通して色んな人達との繋がりができました。卒業をしてもその繋がりを大切にしながら、１日１日を対象の方々のため、そして自分自身の成長のためにも無駄にすることのないよう過ごしていきたいと思います。

そして、私もいつか旭医の先生方のように、自分の職業の楽しさを言葉だけではなく、表情でも伝えられるようになりたいと思います。

# 旭川医科大学大学院医学系研究科　学位記授与者名簿

平成22年３月25日付

| 氏　　名 | 課程・論文の別 | 専　　攻 | 学　　位 |
|---|---|---|---|
| 三　好　　茂　樹 | 課　程　博　士 | 生体防御機構系 | 博　　士（医　学） |
| 黒　田　　光 | 課　程　博　士 | 生体情報調節系 | 博　　士（医　学） |
| 安　住　　誠 | 課　程　博　士 | 細胞・器官系 | 博　　士（医　学） |
| 上　野　　伸　展 | 課　程　博　士 | 生体防御機構系 | 博　　士（医　学） |
| 坂　上　　英　充 | 課　程　博　士 | 生体情報調節系 | 博　　士（医　学） |
| 長　森　　恒　久 | 課　程　博　士 | 生体情報調節系 | 博　　士（医　学） |
| 米熱古丽买买堤 | 課　程　博　士 | 生体情報調節系 | 博　　士（医　学） |
| 渡　邊　　淳 | 課　程　博　士 | 生体情報調節系 | 博　　士（医　学） |
| 吉　川　　大太郎 | 論　文　博　士 | | 博　　士（医　学） |
| 森　合　　重　誉 | 論　文　博　士 | | 博　　士（医　学） |
| 吉　崎　　智　貴 | 論　文　博　士 | | 博　　士（医　学） |
| 石　川　　裕　司 | 論　文　博　士 | | 博　　士（医　学） |
| 山　﨑　　雅　子 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 小日向　　真　依 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 村　上　　智　広 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 伊　東　　弘　恵 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 喜　多　　尚　子 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 工　藤　　恭　子 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 工　藤　　千　恵 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 小　鷹　　丈　彦 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 坂　本　　泰　子 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 周　防　　幾　世 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 菅　原　　あゆみ | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 髙　橋　　剛 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 竹　内　　香奈枝 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 田　仲　　里　江 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 鉢　呂　　美　幸 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 日野岡　　蘭　子 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 正　村　　亜　美 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |
| 小　倉　　笑　子 | 修　士　課　程 | 看　　護　　学 | 修　　士（看護学） |

## 一年を振り返って

医学科第１学年　木　田　涼太郎

昨年度新設されたAO入試北海道地域枠で旭川医科大学に合格を決めてから早いものでもう１年が経ちます。高校時代から住み慣れた旭川の街も、大学に入り様々な面で成長したからという理由なのかは定かではありませんが、どこか去年と違った感じを受けています。

この１年が早く過ぎたのは何故だろうと考えてみると、大学生活の充実以外に答えを導きだせません。ではこの充実を得ることが出来た要因は何でしょうか？

第一に同期の友人の存在が挙げられます。今年度の新入生は北海道出身者が７割を占めたのでやや例年に比べ傾向が弱いですが、経歴・年齢・出身地ともに多種多様な同期と共に学習や生活を共にすることが自分にとって素晴しい刺激となりました。今年出会った100名強の友人達とはこれからの５年間だけでは無く、医師となりそれぞれの道に進んだ後も貴重な同志として心強い存在になると確信しています。

次に優しくしてくださった先輩方の存在も大きかったと言えます。入学して右も左もわからない僕に講義の事、生活の事など親切に教えて頂いた準硬式野球部の先輩方には感謝してもしきれません。数年を経て後輩が増えた時、自分も同じように慕われるような先輩になりたいと強く思います。考えればこういう風に旭医の伝統は積み重ねられてきたのでしょう。

そして最も大きな要因はやはり旭医の恵まれた学習環境でしょう。１年生は確かに本格的な医学を学ぶというよりは教養科目であったり化学・生物・物理のいわゆる理科を中心に学ぶため、一体将来何の役に立つのか目標を見失いがちです。しかし先生方の熱意ある授業、チュートリアルや実習などで好奇心をくすぐられることが多く、メリハリのある学習を継続する事が出来ました。

次の４月を迎えると学年が１つ上がり、本格的な医学の勉強が始まります。将来において自分の理想とする医療従事者に近づくためにもより気持ちを引き締めて臨んでいきたいと思います。

## 一年を振り返って

医学科第１学年　眞　島　昂　也

合格したという実感が無いままあっという間に過ぎてしまったこの１年。

１年生が終わってしまうと思いやっと自分は大学生になったのだと自覚しました。新たな地で一体どんな人や生活が待っているのかと希望をふくらましているなかこの旭川という土地で生活が始まりました。

入学当初から良き先輩や友人にかこまれ最初から充実した生活を送ることができました。周りには浪人生もいれば自分の倍生きている人などさまざまなバックグラウンドを持つ人たちが混在しているため一緒にいるだけで社会勉強をしている気分になれます。部活動では何をやろうか迷っているうちに結局２つの運動系の部活にはいってしまい、体育大学なのではないかと思うくらい毎日くたくたになるまで部活にうちこむ日々が続いています。

この学校に入学して毎日楽しく過ごしていましたが、全てが楽しいというわけではありません。当然医学部なので学業のほうもしっかり頑張らなければなりません。大学の勉強は高校の頃とは比べ物にならないほど暗記量が多く、内容も難しくなっています。しかも自分は高校のころから要領も悪く、根気も無かったので学業に関しては非常に苦労しました。それでもなんとかこの１年間を乗り切ることができたのは、自分を支えてくれている友人や質問に行けば丁寧に教えてくださる先生方のおかげだと思っています。来年からはもっと内容も難しくなり勉強時間も増えると思いますが、将来の目標に向かって勉強をやらされるのではなくて積極的に自分から知識を吸収していきたいと思います。

せっかく大学生になるのだから実りの多い１年にしようと思っていましたが、振り返ってみると予想していた以上に充実して楽しい１年間だったと思います。そして４月には新しい仲間たちが入ってきます。この１年間自分が先輩方や同級生たちに支えてもらったように来年からは自分が周りを支えていけるよう努力しながら日々を過ごして行きたいと思います。

## 一年を振り返って

医学科第１学年　中　田　亜　希

気がつけばもう、大学に入学してから約１年が経とうとしています。不安と楽しみに満ちた毎日を送り、充実した１年間を過ごすことができました。

大学生になった春、最も不安なことは勉強についてでした。高校の時とは違い、講義の内容をすぐに理解することも難しくなり、試験が近づくととても焦りを感じました。しかし、徐々に勉強する習慣もつき、自己学習の習慣が大切であることが実感できるようになりました。試験前には友達と一緒に勉強したり、質問に行ったりしますが、理解しようとするその過程においても、新たな発見があり、勉強の奥深さを感じます。試験やレポートはつらくても、終わった瞬間の開放感は何とも言い表せなく、達成感が得られたときにはうれしくなります。

さらに、勉強だけではなく、普段の生活や部活動などでも自分の力を精一杯発揮しようと努力し、楽しむことができました。正直、大学でここまで部活動に打ち込むことはないだろうと考えていましたが、実際はみんなで意気込み、練習し、熱くなっています。また、様々な人との関わり合いは自分に新たな刺激を与えてくれました。

この１年間でどの程度成長することができたのかはわかりませんが、大学生、特に医学生であるという自覚は少しずつ出てきたような気がします。チュートリアルやコミュニケーションに関する講義、先輩医師の講演などはとても興味深く、医師になるのはまだ先の話かもしれませんが、今から考えることは大切だと思いました。しかし、今は医学生だからといってそれにふさわしい態度やコミュニケーションができているとは思えません。講義で学んだことを行動に移せるように意識していきたいと思います。

大学生になって１年、まだまだ学ぶことはたくさんありますが、初心を忘れることなく、自分らしさも失わないように、これからも楽しく生活していきたいと思います。

▲医学科入学式

▲看護学科入学式

▲入学式の朝

▲入学式の朝

平成21年４月10日（金）　撮影

## 一年を振り返って

看護学科第１学年　小野寺　加　純

見知らぬ地である旭川に不安と希望を抱えて私が旭川医科大学に入学してから、あっと言う間に１年が過ぎました。この１年間は毎日がとても充実していました。入学前に抱いていた大学生は自由で暇というイメージとは遠い忙しい毎日でしたが、同じ志を持ち、辛い時には励ましあえる仲間が周りにたくさんいたように感じます。７月の基礎看護学実習では、自分の知識不足や身についていない技術にとても情けなくなりましたが、病棟の看護師さんや患者さんと触れ合うことによって、机上では得ることのできないたくさんの学びを得ることができ、看護師になりたいという気持ちがより大きくなりました。また、今年度から新カリキュラムが始まり、２学年と同じ授業をうけたことは、１学年のうちから少しでも専門的なことを学ぶことができ、勉強になりました。早期体験実習Ⅰでは、基礎看護学実習よりも利用者さんとお話をする機会があり、コミュニケーションを学ぶよい機会になりました。基礎看護学実習中にある患者さんに「いい看護師さんになってね。」と言われ、今の私にはいい看護師とは何であるのかがよくわからないので、残りの３年間、様々な経験をし、それを模索していきたいと思います。こう振り返ってみると、この１年は私が想像していたよりも、素敵で実りある１年でした。また、初めて親元を離れて生活することにより、両親や周囲の支えのありがたさをひしひしと感じました。これからも、１日１日を大切に、周囲の支えに感謝する心を忘れず、様々な経験を自らの糧とし、成長していきたいと思います。

## 一年を振り返って

看護科第１学年　南　　彩

先日後期試験が終わりました。一年生も終わりです。この一年間を振り返ってみると、入学したての頃がとても昔のことのように思えます。それくらい旭医で過ごした毎日は濃いもので、充実していたのだと思います。初めはクラスメイトの名前と顔が一致しなかったり、廊下ですれ違うお医者さんに感動したり、学校内で迷ったりしていました。でも、今では全てが見慣れた光景となりました。不安でいっぱいだった大学生活もたくさんの友人に恵まれて毎日楽しく過ごせています。

授業では、想像以上に時間割りがつまっておりレポートに追われる毎日もありました。しかし、専門教科や技術の練習があって、高校のときは受験に向けての勉強中心でしたが今学んでいるのは看護師になるために必要なもので、直接夢につながっていると考えるととても興味深く取り組めています。特に、技術の授業では座学だけではなく自分の身体を実際に動かし、援助の演習を行っています。看護師役、患者役とどちらも経験することで患者役の気持ちにも目をむけられるようになりました。さらに基礎看護学実習では、私ができることはほんとうにわずかでしかなかったけれど、患者さんから「ありがとう」と言われたり、「がんばってね」と声をかけてもらえたことがとてもうれしく、自分が看護師になるという実感も改めてわいてきました。よい面ばかりではないと思いますが、やりがいのある仕事だと思いました。もっと多くのことを学んで早く看護師として働きたいとも強く思いました。

私が学んできたことはまだほんの一部ですが、この一年生で学んだことが全ての基礎となります。学年が上がるにつれて勉強も大変になっていくと思いますが、今の気持ちを忘れないで、慣れることも大切だけれどいつも新鮮な気持ちで取り組んでいきたいと思います。また、この大学での人との関わりも大切にしながらこれからも過ごしていきたいです。

# 教授就任のご挨拶

健康科学講座地域保健疫学分野教授　西　條　泰　明

平成21年９月10日付けで健康科学講座地域保健疫学分野教授を拝命いたしました。本分野は旧公衆衛生学講座にあたり、初代の福山裕三名誉教授、２代目の羽田明教授（現千葉大学公衆衛生学講座教授）の後、しばらく空席でしたが、３代目となります。私は、卒業後はしばらく本学の内科学講座循環・呼吸・神経病態内科学分野（第一内科）にお世話になっており、内科・循環器内科医をしておりました。その後、北海道大学大学院医学研究科予防医学講座公衆衛生学分野で学位を取得しまし、同講座で、助手、学部講師を経て、平成18年４月より、本学健康科学講座の助教授（その後、職名変更で准教授）に採用していただいておりました。

研究に関しては疫学を中心として行っており、北海道の職域でのコホート研究により、高感度CRPや脈波伝播速度（pulse wave velocity）の健康診断での意義や、職業ストレスや社会経済要因の健康影響について研究をして参りました。その他、シックハウス症候群に関する全国疫学研究に参加し、室内化学物質濃度、湿度環境や生物要因の自覚症状への影響について報告してきました。また、遺伝子多型の疾患感受性に関する研究では、サイトカインの遺伝子多型や薬物代謝酵素の遺伝子多型による疾患感受性や環境との交互作用に関する研究をしてまいりました。さらに、環境省「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」が計画されておりますが、アレルギー・免疫班として、調査票作成に関わり、北海道班の実際の調査にも参加する予定です。さらに、医師の働き方についてと、地図情報を利用した医療機関の適正配置などの研究を現在進めており、これにより北海道、特に道北・道東の医療体制改善のためになればと考えております。

これまでの臨床経験と疫学研究を行ってきた中で、Evidenced based medicine（EBM）の推進のためには、疫学・臨床疫学の知識が必須となってきており、その教育を充実させていくことが必要と考えております。EBMの推進のためには、学会ガイドラインやメタアナリシスのサマリー等を見るのみでなく、原著論文に当たらなければならないこともでてくると思います。そのような中で、最低限の疫学の知識がない場合は、論文を正しく読むことが出来ない可能性があります。国家試験でも疫学についての問題がコンスタントに出題されており、医師としての必要な知識として認識がされていると思います。

学部教育では、以上の様に疫学はもちろん、大学にとっての使命である地域医療の重要性を含めた社会医学教育について充実させていくようにしたいと考えております。

最後に、疫学・臨床疫学・社会医学の研究を考えていて方法等について相談したい、大学院に進みたいといった場合は、いつでも連絡をいただけたらと思います。さらに、当講座では産業保健教育も充実しています。健康科学講座人間環境保健分野の吉田貴彦教授は労働衛生コンサルタント資格を取得していて日本産業衛生学会の指導医であり、私も労働衛生コンサルタント資格を取得していて日本産業衛生学会の専門医を取得しています。産業保健に感心のある方、また労働衛生コンサルタントや日本産業衛生学会専門医を目指したい方もご連絡下されば力になれます。

以上、私のこれまでの経歴、研究とこれからの抱負を簡単に述べさせていただきましたが、本学の発展のために専心努力する所存です。今後ともご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

# 教授就任の御挨拶

保健管理センター所長　教授　川　村　祐一郎

平成21年９月10日をもちまして、保健管理センター教授を拝命し旭川医科大学保健管理センター所長に就任いたしました。平成16年２月に当センター専任医師として着任、同年６月以降は准教授として勤務しており、今回初の専属の所長となったわけですが、これまで御指導いただいた高後教授、松野教授、羽田教授に深い感謝の念を表明させて頂きます。

私は旭川医科大学の３期生として昭和56年卒業、直ちに第一内科に入局し、主に循環器内科医として研鑽を積んでまいりました。ある時期から不整脈の分野が仕事の中心となってきましたが、平成３～５年、当時の小野寺壮吉教授（故人）のお許しを得て海外留学できたことが、その後の基礎並びに臨床不整脈学への造詣を深める大きな出来事であったかと思われます。

一方、私は専任医師となるかなり以前より保健管理センター非常勤医師ないしはその代理としてセンターに出入りしており、その縁は浅からぬものでありました。菊池健一郎先生が所長（兼任）であった時代には、学生の健診データをもとに自律神経系・マグネシウムとメタボリックシンドローム（この言葉は当時はあまり人口に膾炙されていませんでした）の萌芽というテーマで経年的研究を開始し、現在も継続しております。この分野の研究では平成18年に「独創性のある生命科学研究」として旭川医科大学に御採択頂きました。

さて、この世界に入って改めて実感したことは、旭川医科大学病院に勤務する医師という立場一本であった時代にはさほど注意を払っていなかった、というより対岸の火事的に認識していた、学生のメンタルヘルスや感染対策の重要性です。全国の大学の、保健管理センターを始めとする学生相談施設がその対応に全力を注いでおります。旭川医科大学創設当時の先人の先生方に敬服申し上げたいのは、当センターが昭和59年、初代センター長保坂教授（眼科）のもとに開設された当時から「敷居の低いセンターづくり」ということをモットーとされていた点であります。メンタルヘルスにせよ感染症流行の初期にせよ、学生が「こんな些細なことで相談したら笑われるかな？」などと思わず遠慮なく、保健管理センター来所を逡巡せず相談に来ていただくということが、その後の問題の抽出および予防対策にきわめて重要なのです。もちろん結果的には些細なことが多いかも知れませんが、あるものは何か重大なことの初期徴候である可能性もあります。この５年間、さまざまなメンタルヘルス上の問題や感染症の流行（近々は新型インフルエンザ）を経験し、その初期段階を捕らえることの重要性を痛感しております。「敷居の低い」点においては、現職員である保健師藤尾美登世先生、並びに事務補助員佐々木めぐみさんの醸し出す雰囲気は素晴らしいものと私は常々思っており、「そんなことで来たのかい」などと言わずに気軽に相談できるセンターの運営を、このお二人を見習い、教わりつつ今後も継続していきたいと考える次第です。

当然のことではありますが、所長を拝命した今、私の立場は単なる保健管理センター専任医師という、言うなればやや受動的なものから、大学の健康管理の責任者として、システムの見直しや新設、各種キャンペーンの実施など、中枢的な活動を責任もって推進する立場に転じたものと思います。この認識を忘れず今後も鋭意努力していく所存です。重ねて申し上げますが、大学における健康管理という課題は、就任以前に私が思っていたよりはるかに大きな、しかも重要な課題であります。一個人ないしは少人数の一センターで完遂できるものではないことは論を俟ちません。医学科・看護学科の教官の諸先生方、診療各科の諸先生方をはじめ医療スタッフの皆様、学生支援課を中心とする事務職員の方々、さらには（おそらく最も重要！）学生諸君の、学年という横の連携や部活等を中心とした縦の連携、こういった様々な人たちによるチームプレイ（というより全員野球みたいなもの！？）に帰依するところが極めて大きな一事業です。皆様の御支援を乞う次第です。何卒よろしくお願い申し上げます。

# 教授就任のご挨拶

病理学講座 腫瘍病理分野教授　西　川　祐　司

病理学講座 腫瘍病理分野（旧病理学第一講座）の第３代教授として、昨年11月16日付けで秋田大学より赴任いたしました。私は本学の６期生であるとともに、初代教授故下田晶久先生の教室で学んだ最後の大学院生です。また、大学院修了後、第２代教授小川勝洋先生のもとで助手を勤めさせていただきました。この地で再び病理学に携わり、後輩を指導する機会を与えられたことを光栄に感じます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

私は、学生時代の病理実習で、無数の細胞が織りなす病理組織像の圧倒的な複雑さを前に立ち往生した自分がもどかしく、まずはものを正しく見る力を養う必要があると思い、「下田病理」に入門しました。下田先生に毎日、標本の見方や考え方を教えていただいた最初の1年間は、かけがえのない経験でした。何を見てもすぐに組織像が想像されてしまう、そのような先生に少しでも追いつきたいと努力しているうちに、いつのまにか四半世紀が経過しました。私の病理学に対する気持ちは、イチロー風に表現すると「病理がもっとうまくなりたい」となり、これは今後も変わらないと思います。

病理学には診断病理と実験病理の両面がありますが、近年、これらの二極化が進んでいます。私は病理学を実践する過程で、診断と実験（研究）の間に密接な関係があることを知りました。研究は新しい事実や隠されていた因果関係を発見したりするために行うわけですが、個々の症例の病理診断においても、多かれ少なかれそのような発見が含まれています。自分自身の病理学研究においては、病理診断をする中で未解決な問題を発掘し、それらを実験、研究により深めていくという基本姿勢をとりたいと考えています。特に、慢性炎症によって引き起こされる細胞や組織の病態（肝硬変、間質性肺炎など）を明らかにし、予防や治療のための手がかりをつかむのが目標です。腫瘍学の基礎研究にも積極的に取り組みますので、今後、各部門の皆様と広く共同研究ができればと願っています。

私は医学教育に主体的に関わることで、研究者の心を持った学生を１人でも多く育てたいという願望をもって旭川にまいりました。教育をすることは、自分自身が学ぶことでもあります。それだけに、たまたま聴講した基礎系の授業で出席率が３割に満たなかったり、招聘講師の授業中、配布された出席カードに名前を書いた途端に群れをなして学生が退室していくという本学の現実は私にとって少なからずショッキングでした。学生の諸君に一言。授業に出るのは出席カードを出すため、などという浅ましい考えは捨てて欲しい。原則的に講義や実習には出席し、参加しなければなりません。医学部で勉強を始めたばかりの学生諸君だけでなく、私たち教師も発展途上です。医学を含めた学問はまだまだ不完全であって、そのために私たちは日々勉強し、研究しているのです。そのような人間として相互に尊重し、対話する姿勢がなければ、学問の発展を望むことはできないし、大学としての存在価値も失いかねません。

私自身は決して誉められた学生ではありませんでしたが、教養、基礎の多くの先生方にお付き合いいただき、さまざまな影響を受けたことに感謝しています。特に、哲学の初代教授岡田雅勝先生のお部屋では、大学卒業後も毎週、難解な外国語のテキストを題材に、白湯のようになった番茶をいただきながら、2時間、3時間と至福の時間を過ごさせていただきました。これが私の中の大学の原風景であり、私たちの教室も病理学教育を通じて、学生の心に良い意味での刻印を残せるよう最大限努力したいと思います。

医療改革とその後の医療崩壊の渦中にある現在こそ、医学教育の理想を追求することも大切ではないかと感じています。第二次大戦前夜のスイスにおいて、ヘルマン・ヘッセが架空の理想郷カスターリエン地方を舞台に、総合芸術「ガラス玉演戯」の名人ヨーゼフ・クネヒトの生涯を描き続けたように。

# 移植医療の新しい出発

外科学講座　消化器病態外科学分野　教授　古　川　博　之

この度、2010年１月１日付けをもちまして、消化器病態外科教授を拝命しました。初代水戸廸郎教授、二代目葛西眞一教授に続きまして、三代目となります。元々、当教室は移植医療と縁が深く、これまで、特に肝細胞移植の分野で世界に名を轟かす業績を上げてきました。従って、私がこれまで行ってきた臓器移植とも密接な関係にあり、これからも、これまで教室で築き上げられてきた伝統を継承するとともに、臨床、教育、研究の充実、発展を図り、新風を吹き込むことができればと考えております。

私は、1980年、神戸大学を卒業し、その後、６年間天理よろず相談所病院で研修をうけ、同病院腹部一般外科のスタッフとなりましたが、1987年、縁あって、アメリカ、ピッツバーグ大学の外科に留学する機会を得ました。そこで、世界の肝移植の創始者ともいえるスターズル教授とその教え子である岩月教授、藤堂教授の３教授に会うことになるのですが、ピッツバーグで驚いたことは、とても一般の医療では助からないような重症肝不全の患者が肝移植を受け、次々と元気になって退院していくことでした。移植医療の現状を目の当たりにし、その魅力にとりつかれ、肝臓移植や小腸移植の臨床並びに研究に携わっているうちに、いつの間にか９年半の年月が経っていました。

1997年、藤堂教授が北海道大学第一外科（現消化器外科・一般外科）教授に就任されるにともない、「一緒に北海道、そして日本に移植医療を定着させよう」とのお誘いをうけ、私も北海道大学に赴任しました。その後、1997年には生体肝移植第一例目を施行、1999年には、日本で第一例目の脳死下臓器提供にもドナー支援チームとして参加し、2001年には北海道で最初の脳死肝移植を施行しました。また、同年に置換外科・再生医学講座の教授となり、2009年末までに、200例を超す生体肝移植、13例の脳死肝移植、そして２例の膵腎同時移植を行って参りました。

これまで、日本で移植が盛んにならないのは宗教のせいや文化のせいとされておりました。我々もこれが本当かどうかを確かめるべく北海道でも独自の調査をおこないましたが、一番大きな問題は、脳死が発生する救急現場で、脳死の診断がなされていないこと、そして、たとえ脳死の診断がなされても意思表示カード所持の有無が確認されていないことでした。さらにいえば、腎臓の提供は、心臓停止後でも家族の承諾があれば可能なのですが、その確認も一切なされていませんでした。これでは、せっかくの尊いご遺志が無駄になってしまうということで、1998年に立ち上がったのが北海道移植医療推進協議会です。これは、旭川医科大学第２外科から北海道赤十字血液センター長に就任された故関口定美先生のご尽力によるもので、官界、財界、学界を巻き込んで移植医療の啓発と移植時の支援体制を確立してゆこうというものです。

協議会の仕事として、まずは、移植の現状を把握するために、道内主要病院での入院時意思表示カード所持確認を行い、２％の方が意思表示カードを持っていることが判明し、年間５－10人の脳死下臓器提供の可能性が推察されました。また、ドナー・アクション・プログラムに則って、臓器提供病院での意識調査を実施しましたところ、移植医療の重要性は認識されているものの院内に移植の説明をでき、これを推し進める医療関係者が少ないことがわかり、院内コーディネーターの育成を開始しました。現在、道内19施設47名の院内コーディネーターが道知事から委嘱状を受けています。2004年からは救急医・脳外科医のコンセンサスミーティングが始まり、2009年で９回目が行われ、臓器提供の可能性がある現場で働く医師の意見交換の場となっています。こうして、北海道の移植医療は少しずつ前に進んでおり、一時は、北海道の年間献腎移植（心臓停止下の腎移植）数がゼロになった時期もありましたが、2004年より急速にその数を伸ばし2008年には18件を数え、移植数を待機患者数で割った数値で北海道が4.0％と日本一になっています。

今年は７月17日に改正臓器移植法が実施されることもあり、移植医療にとっても大きな飛躍の年です。今まで10件前後であった臓器提供数が50から100件まで増加するといわれており、移植を待っておられる患者さんにとっては大きな福音です。これを成し遂げるためには、移植コーディネーターをはじめとするあらゆる医療従事者、各科や各部の協力によって、しっかりしたチーム医療を築き上げることが必要です。本学でもチーム作りを着々と進めて行きたいと思っておりますので、ご理解ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

# 外科とニューロサイエンスを融合した最先端脳神経外科手術を目指して

脳神経外科学講座教授　鎌　田　恭　輔

平成22年1月16日より旭川医科大学脳神経外科学講座 教授を拝命いたしました。前任地の東京大学より母校のために働かせていただける機会をいただいたことに心より感謝するとともに、現在の北海道の脳神経外科を含めた医療を取り巻く状況の難しさに身の引き締まる思いでいます。初代　米増祐吉先生、先代　田中達也先生が築いた脳腫瘍学、てんかん学の臨床的背景のある教室で、私の学んできた脳血管障害手術、脳機能温存を考慮した脳腫瘍手術を融合することで新たな脳神経外科学を造り上げていきたいと考えております。

私は昭和63年旭川医科大学を第10期生として卒業いたしました。学生時代はアルペン競技スキー部に所属し、多くの仲間と体力と精神力を鍛えていました。趣味では改造した900ccのオートバイに乗り動体視力を鍛えながら神楽岡通りを毎日楽しく通学していました。大学の講義では、脳神経外科でCT scanによる脳腫瘍の自動診断プログラムと顕微鏡による繊細な手術、当時の第2内科での神経学の複雑さと緻密な診察、さらに第2外科の人工臓器開発などに強い刺激を受けました。その一方で医学と工学系の連携した臨床へのあこがれもあったため、電子科学研究所のある北海道大学脳神経外科（阿部　弘教授）に入局いたしました。

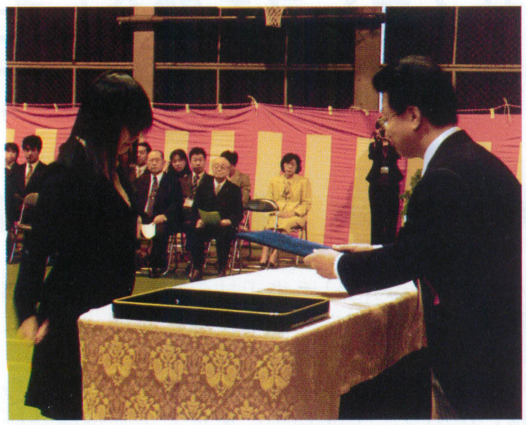
卒後7年間は札幌、道東および道南地区の病院で脳血管障害の手術治療を専門に従事してきました。その間4年目から2年間北海道大学　電子科学研究所（栗城真也教授）で念願の工学部での研究をさせていただきました。研究テーマは超伝導量子干渉素子計により脳から発生する微小磁界を計測する（脳磁図）というものでした。当時は頭蓋内疾患をもつ患者では画像上からでは運動野を術前に同定することは困難でした。同定のためには開頭後正中神経刺激による誘発電位を脳表から直接検出していました。私は術前に脳磁図による正中神経刺激誘発磁場信号源をMRI画像に重ねることを臨床に応用に成功しました。この経験より脳機能解明と脳血管を温存を心がけた手術に改良するように心がけてきました。

その後ドイツ政府よりAlexander von Humboldt財団より奨学金をいただきドイツのErlangen大学へ留学する機会に恵まれました。ここでは脳梗塞周辺部の脳機能、代謝変化の検討を行っていました。その2年後には米国Georgetown大学（Washington DC）へ移り、様々な国の人々と臨床、研究、さらにお互いの歴史についても外国語を駆使して議論をするようになりました。これらの経験より自分は日本人の臨床医としての自負を持ち、また国際社会で対等に議論を交わせるようになるべきだと強く感じました。このためには手術手技の研鑽に加え、病態、神経学、基礎生理学、各種検査の原理、さらには語学にも精通する決意を心に刻み込みました。

帰国後は米国留学時代の東京大学の仲間からの強い誘いがあり、平成15年に東京大学脳神経外科へ移りました。東京と北海道の臨床、および研究方針は大きく違う部分も多く、はじめはその文化の違いに戸惑いました。しかし、治療に対して熱心な医師と脳科学界で活躍している神経科学者との連携が瞬く間に築き上げることができました。その結果、MRIを用いてヒト脳皮質－白質機能の画像化に成功し、術中電気生理学的モニタリングを併用しながら、運動、言語機能などを温存する手術方法を確立しました。さらに東京大学脳神経外科　副病棟医長、病棟医長・講師としての役職に尽かせていただき、従来の血管障害手術以外には、手術モニタリング、覚醒下手術などを駆使して脳腫瘍摘出術を数多く経験してきました。これらの経験より救急治療、脳血管障害、脳腫瘍手術など幅広い臨床を学びました。

今後は私の一貫したポリシーである“患者第一”の精神と“外科と脳科学と融合した最先端脳神経外科手術”を目指していきたいと思います。そのためには今まで学ばせていただいた様々な手術手技、戦略を駆使して、ベストと考える治療を選択していきます。また、私の一貫した研究テーマである脳機能画像を含め、各地で吸収した世界最先端の知識と技術を臨床応用して患者に還元していきたいと思います。その一環で脳腫瘍症例に対しては脳機能画像とニューロナビゲーション装置を融合、安全性を高めつつ、機能温存しながら最大限の病巣摘出を可能にしていきます。前任地の東京大学で私が開発した脳機能温存手術を旭川医科大学、北海道へ広めていくよう努力してまいります。また脳卒中については開頭術一辺倒ではなく、世界標準の血管内治療（コイル塞栓術、ステント留置術）、血栓溶解療法、血管奇形等には放射線治療の組み合わせを外科治療に加えて、三つの主軸としていくつもりです。最新の知識を用いて低侵襲かつ最適な治療を実践することで、今まで学ばせていただいた母校　旭川医科大学に貢献できるものと考えています。学生、若手医師には脳神経外科手術、救急医療、神経科学への魅力をアピールすることで、臨床と研究をバランス良く触れながら取り込めるよう支援していきます。また、私自信の人脈も活かし、日本のみならず、世界につながる知識を吸収できる体制を提供していけるよう努力してまいります。今後とも皆様のご理解、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

# 平成21年度　1年のあゆみ


入学式

**入学式**
4月10日(金)

| | |
|---|---|
| 医学科入学者 | 102名 |
| 看護学科入学者 | 60名 |
| 看護学科3年次編入学者 | 10名 |

入学式の朝

**新入生合同研修会**
4月13日(月)
14日(火)

BLS+AED

手話の演習

ゲームコーナー

**第34回医大祭**
6月12日(金)
13日(土)
14日(日)

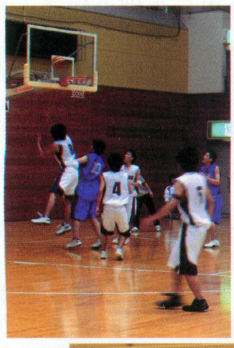
フリーマーケット

古本市

古本市

体験コーナー

**第56回北海道地区大学体育大会**


バスケットボール試合
(7月17日㈮18日㈯19日㈰)

柔道(7月11日㈯)

陸上競技(7月11日㈯)

# 平成21年度　1年のあゆみ

## 音楽の夕べ
7月20日（月）

室内合奏団

ギター部

ジャズ研究会

ブラスアンサンブル

合唱部

ソフトボール

バレーボール

## 学生リーダーシップ賞表彰
7月24日（金）

## 体育大会
8月27日（木）

バスケットボール

サッカー

## 解剖体慰霊式
9月16日（水）

## 医学科第2年次後期編入学生入学式
10月1日（木）

## クリスマス　コンサート

室内合奏団（12月12日㈯）

ブラスアンサンブル（12月20日㈰）

合唱部（12月19日㈯）

## 学位授与式
3月25日（木）

| | |
|---|---|
| 医学科三十二期生 | 96名 |
| 看護学科十一期生 | 68名 |
| 医学博士 | 12名 |
| 看護学修士 | 18名 |

## 各種保険について

**○本学医学科学生が加入する保険の概要は、下記の図のとおりで①から③の3階建てとなっております。**

| ③　学研災付帯学生生活総合保険A・Bタイプ　※3階部分 | |
|---|---|
| 内容 | 傷害・損害賠償を24時間補償＆針刺し事故を補償 |
| 補償金額 | 死亡補償金　Aタイプ・Bタイプ　300万円<br>対人賠償　Aタイプ・Bタイプ　1億円限度<br>対物賠償　Aタイプ・Bタイプ　1億円限度<br>感染予防費用　保険期間中50万円 |
| 掛金 | 別表のとおり。 |
| 加入 | ※学生教育研究災害傷害保険（学研災）及び医学生教育研究賠償責任保険（医学賠）に加入していること。 |

| ②　医学生教育研究賠償責任保険（医学賠）　※2階部分 | |
|---|---|
| 内容 | 正課中、学校行事中、通学中に、他人にケガをさせたり、他人の財物を壊したことにより被る法律上の損害賠償を補償 |
| 補償金額 | 対人賠償と対物賠償合わせて1事故につき1億円限度 |
| 掛金 | 6年間 3,000円　5年間(編入学生) 2,500円(1年間500円) |
| 加入 | 入学時加入を義務付けている<br>※学生教育研究災害傷害保険に加入していること |

| ①　学生教育研究災害傷害保険（学研災）　※1階部分 | |
|---|---|
| 内容 | 正課中、課外活動中、通学中及び学校行事中に本人が傷害等の事故にあった場合 |
| 補償金額 | 死亡補償金　正課中　2,000万円<br>課外活動中　1,000万円<br>傷害補償金　正課中　治療日数4日以上から<br>課外活動中　治療日数14日以上から<br>入院　1日　4,000円 |
| 掛金 | 6年間 5,400円　5年間(編入学生) 4,700円 |
| 加入 | 入学時加入を義務付けている |

詳細については、学生支援課学生係にお尋ね願います。

本学では、学生諸君の学生生活及び日常生活に対して上図のような保険を用意して、加入を薦めております。

①学生教育研究災害障害保険（学研災）は、学生生活中に負った本人の傷害等の保険です。加入を義務付けております。

②医学生教育研究賠償責任保険（医学賠）は、学生生活中に他人から損害賠償を求められた場合の賠償補償保険です。加入を義務付けております。

③学研災付帯学生生活総合保険A・Bタイプは、日常生活24時間をカバーする傷害保険と賠償補償保険です。

医学科第1～4学年の4年間は任意加入ですが、臨床実習が4学年後期からあるために2年2月間の保険加入を義務付けています。なお、入学時に6年間加入をしてもかまいません。

**○平成22年に入学する本学看護学科学生が加入する保険の概要は、下図のとおりとなります。**

(1)　看護学科学生Will 2保険（看護学科学生対象）

本保険は、正課中、学校行事中、課外活動中及び通学中における事故により、学生本人が身体に傷害を被ったとき、また、他人を負傷させたり、他人の物を壊したことによる法律上の損害賠償を補償し、実習中における感染予防措置費用等を補償する保険です。この保険は、加入を義務付けております。

| ①　看護学科学生Will 2保険 | |
|---|---|
| 内容 | 傷害・損害賠償を24時間補償及び実習感染予防費用 |
| 補償金額 | 死亡補償金 400万円　対人賠償1事故 1億円限度<br>入院保険金 5,000円　対人賠償1事故 1億円限度<br>通院保険金 3,000円　感染予防費用 50万円限度 |
| 掛金 | 4,500円（1年間） |
| 加入 | 本保険は、大学として加入を義務づけております。なお、契約期間が1年間のため本学では、入学時に4年間分また、編入学生は2年間分の保険料を入学時に徴収し、大学として契約手続きを行います。また、契約更新時も大学で手続きを行います。 |

## 平成22年度日本学生支援機構奨学生の募集について

日本学生支援機構は、優秀な学生で経済的な理由で就学困難な者に学資を貸与しています。

本学では、日本学生支援機構からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本学生支援機構へ推薦します。ただし、日本学生支援機構では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

平成22年度の募集説明は4月14日(水)午後5時から看護学科大講義室において実施します。希望者は必ず出席してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、学生支援課学生係に相談してください。

## 平成22年度看護学科学生に対する奨学資金の貸与について

本学では、看護学科に在籍する学生に対して経済的支援を行うことにより、学習に専念できる環境の整備を図るため奨学資金を貸与しています。

奨学資金の概要はつぎのとおりです。

○貸与対象者　医学部看護学科学生

○貸与月額　35,000円

○返還　貸与を受けた期間と同等の期間内に、一括または分割で返還

○返還免除要件　被貸与者が卒業後直ちに、本学病院に常勤の看護職員として勤務した場合は、勤務月数に相当する月数分の返還を免除

貸与を希望される方は、学生支援課学生係へお越しください。申請書等をお渡しします。

申請書配布　平成22年4月2日(金)～平成22年4月23日(金)

申請期限　平成22年4月28日(水)まで

なお、在籍者（休学者又は留年者は除く）についても、貸与の申請を毎年行うこととなっております。ご注意ください。

## 平成22年度　前期分授業料免除及び延納・分納について

平成22年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する学生で、免除基準のいずれかに該当すると思われる者は、学生支援課学生係にて必要書類を受け取り、申請期限までに提出してください。

免除基準の概要はつぎのとおりです。

○経済的理由で授業料納入が困難であり、かつ学力優秀と認められる場合

○授業料納期前6か月以内において学資負担者が死亡、又は風水害等の災害を受け、授業料納付が著しく困難であると認められる場合

なお、このことについては、公用掲示板にも2月10日(水)より掲示してありますので確認してください。

また、不明な点は、学生支援課学生係に問い合わせ願います。

申請期限　在学生　平成22年3月31日(水)
　　新入生　平成22年4月12日(月)

※授業料滞納者の授業料免除申請は、受理できませんのでご注意ください。

## 授業料未納による除籍について

授業料を2期滞納し所定の期日までに納入されない場合には、除籍となります。

この取扱いは、平成17年度から適用されていますので、平成22年4月1日において授業料を2期以上滞納している場合、平成22年9月30日をもって除籍となります。

以後授業料納期である6か月ごとに適用されますので、授業料の支払計画をきちんと立てるようご留意ください。

## 新入生歓迎合宿の御案内

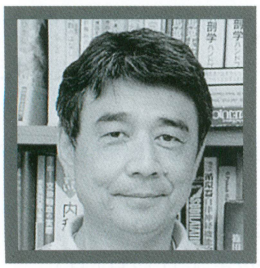
新入生歓迎実行委員会

皆さん、ご入学おめでとうございます。我々、新歓委員は右も左もわからないであろう新入生の皆さんのために新入生歓迎合宿というものを用意しています。日程としては、入学式の週末の4月10日(土)、11日(日)に行います。気になる内容についてなんですが、まず、学内では大学見学、部活紹介、出店といった行事があります。ひとつずつ補足していきますと、大学見学では一年生が使う教室などを私たちが案内します。部活紹介はその名の通り数多くある部活が皆さんを勧誘しようと趣向をこらした部の発表をしてくれます。出店というのは部活などに自分のメールアドレスを教えたりする感じですね。そこで沢山の部活に○○書いておくと後々いいことがあるかもしれませんよ??

続いて、夕方にホテル「時屋亭」に場所を移動します。そこでは、みんなで食事したり盛り上がったりと新入生同士の距離がぐっと縮まること請け合いです。また、大学よりもさらに積極的な「乱入」という名の部活の勧誘があるので気になる部活にはどんどん顔を出してみてください。

ここで書いただけではどんな行事かまだつかめないということも多いでしょうが、この新歓合宿に参加したことがきっかけで仲の良い友達を見つけたり、自分にあった部活を決めたりした先輩も沢山いるようです。参加して後悔させることのないように我々新歓委員は入念に準備をしてきました。ぜひ参加して旭川医科大学での生活を楽しいものにしてください!!

## 訃　　報



本学看護学講座岩元純氏（享年59才）には，平成21年12月31日（木）ご逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

同氏は，平成10年４月１日教授に就任され，研究及び学生の教育・指導にあたられ，医学の発展並びに優秀な看護師の養成に多大なご貢献をなされました。

また，学術研究面では，生理学及び基礎看護科学を専門とされ，その優れたご功績は高く評価されております。

（総務課）

本学救急医学講座郷一知氏（享年58才）には，平成22年１月29日（金）ご逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

同氏は，平成14年12月16日教授に就任され，本学の病院長補佐，救急部長，集中治療部長を歴任され，本学病院の管理運営，医学の研究，学生の教育・研究指導にあたられ，医学の発展並びに地域医療の進歩に多大なご貢献をされました。

特に，昨年10月に運航開始された道北ドクターヘリ事業に関しては，準備段階から事業の中心となり，協力・受入体制の整備等にご尽力されました。

学術研究面では，人工心肺使用法の検討，心肺蘇生のシミュレーション導入の検討，心不全・呼吸不全の迅速な評価法の検討などの研究に力を注がれ，その優れたご功績は高く評価されております。

（総務課）

## 学生団体の「継続届」「設立届」の提出について

平成22年４月以降に学生団体活動（部活）を継続する団体の責任者は、４月中に「学生団体継続届」を学生支援課学生係に提出して下さい。なお、継続届を提出しない団体は活動を停止したと判断し廃部とします。

また、新規に学生団体の設立を希望する学生は４月中に学生支援課学生係に「学生団体設立届」を提出して下さい。なお、設立届の提出時に活動内容等に関する説明を求める場合がありますので「活動内容が同じ様な団体がある」等、安易な団体設立は避けて下さい。各届出用紙は学生支援課にあります。

## ギター部「ニューイヤーコンサート」

平成22年１月30日(土)14時00分から病院玄関ロビーにおきまして、本学のギター部によります「ニューイヤーコンサート」が開催されました。当日は、準備、お知らせにあまり時間が無かったこともあり、来場していただく人数も心配されましたが、予想を越える数の来場者となりました。全11曲の演奏となりました今回のコンサートは、後期試験の勉強を前に日頃の練習成果の披露と入院されている皆様に冬のひと時をギターの音色と歌声で癒していただきたく企画されたコンサートです。エリック・クラプトン作「Tears in heaven」の演奏から始まり、「守ってあげたい」や「学生街の喫茶店」などの耳なじみの曲が次々と演奏され来場された皆様からの暖かい拍手や手拍子が部員の熱演を呼び盛況のうちにコンサートが終了しました。

また、３月18日(木)19時00分から同部によります「懐メロコンサート」と題したコンサートが開催され、平日の夜ではありましたが入院されている方々のご来場により盛況のうちに終了しました。